神仙的佛教であつた。又一方には儒教的な佛教でもあつた。

又佛教側が如何にして中國社會に佛教を普及せしめようとして苦心したか、その第一としては、格義の佛教である。佛教の思想を老荘思想に比して、老荘の文字を借りてこれを説明せんとしたことである。無、玄、道などその一つである。

又佛教を中國的に普及せしめんとした結果が、經典の新たなる作成である。所謂僞經と言われるものがこれで、古い目錄である出三藏記集に既に僞疑部が設けられ多くの僞疑經典が載せられている。已下隋唐の目錄の僞疑部の經典は次第に増加して、開元錄には疑惑再詳錄に一四部一九巻、僞妄亂眞錄に三九二部一〇五五巻を出している。この僞經の檢討こそ中國佛教の特質と言わるべきものであろう。

特に孝を中心とした父母恩重經は、儒教の孝に對して佛教の積極的な孝經典であり、又提謂波利經は北魏に作成された五戒を中心とする在家經典で、佛教の五戒を儒教の五常に配合し調和せしめたものである。この二經典は特に中國佛教に取つて重要視されたことは、佛教の大家が例へば天台や吉藏（或は法期、契嵩が提謂經を、宗密が父母恩重經を、恐らく僞經と知りつつこれを引用して、これを强調していることに於いて知ることが出來る。一は佛教儒教の家族倫理の問題であり、一は五戒五常の社會倫理の問題である。禮の世界から戒の世界にどうして入らしめるかと言う一つの大きな問題であつたのである。しかもこの孝と五戒五常との問題は、中國佛教史を通じて、色々な事件と問題とを提供しているものである。

新刊紹介

文學博士　水野弘元著
『パーリ語文法』

（I）出版の意義　わが國におけるパーリ語學研究は、嘗て立花俊道博士による『巴利語文法』に先鞭づけられて以來、既に四十年の歴史を經てきた。その間、長井眞琴博士の『獨習巴里語文法』が約二十五年以前に出版されたのであるが、この兩書を指針として、爾來、斯學に關する學的成果はまことに顯著なものがあつたのである。ところで、今日の段階からすれば、新しく開かれた歴史の窓を通し、廣汎な學的基盤に立脚したパーリ語文法の出版こそ、蓋し、期して久しく待たれたものの一つである。この要請に應えて現在、わが國パーリ語學界の第一人者であられる博士が、その該博な研究領野から樹立された金字塔こそ、まさしく本書であると言えよう。

（II）本書の内容目次　この書は、**I序論**（pp. 1～27）**II音韻論**（pp. 28～63）**III語形論**（pp.64～144）**IV造語法**（pp. 145～157）**V文章論**（pp. 158～189）を主文とし、別に**附錄I**（pp. 190～220）の中に、**パーリ語・パーリ佛教の歴史**を、**附錄II**（pp. 221～246）の中に、**パーリ關係の重要な參考文獻**を網羅し、更に**文法的索引**（pp. 247～317）**固有名詞・件名索引**（pp. 318～333）等の Index を附している。その尨大な量は、從來のパーリ文法書と比較されるものでないことは勿論、從來の、この種の文法書に見られない近緣語との關係に深く留意して筆を進

められていたことは、蓋し、本書獨自の特質と言わねばなるまい。

従つて、本書は、パーリ語學研究に志す學徒にとつて指針たるばかりでなく、廣くインドアリアン語學に携わる學人にとつても、座右必携の良書たることは疑いない。以下、本書が從來のパーリ語文法書と比較して顯著と思われる諸點、特に、Vedic や Sanskṛt との關連においてあるパーリ語に焦點をしぼつて、簡單に本書の内容を述べよう。

(Ⅲ) **本書の内容** 先ず、**I 序論**においては、**《パーリ語とは何か》**という設問から、パーリ語の言語學的位置について述べる。そして、パーリ語が所屬している中期印度アリアン語、すなわちプラークリットについて概説を施す。そこから導き出された結論として、①〈パーリ語はプラークリット中で最古の層〉に屬し②言語學的には〈中層新層の新しいプラークリットよりも寧ろ古代印度アリアン語としての梵語やヴェーダ語により近い〉から③パーリ語の言語學的研究に當つても〈佛教梵語やパーリ語等の俗語の共通基語に近い Sanskṛt や Vedic とも比較〉参照すべきである、と强調している(**序第一章**)。そして、その客觀性を例證するのが、本書を一貫している standpoint である。

このようなパーリ語が、それでは如何なる發達段階を經たかについて一瞥を與えつつ(**第二章**)更に、所謂**《パーリ語の起源》**について從來の諸學說を系統的に解明し、且つその妥當性、缺點等を批判辨證している。そこから、博士は、〈パーリ語におけるマガダ語的要素の存在を認容〉しつつ、〈古代マガダ語で說法された佛陀の言語が上座部の中心地たるウッジェーニー地方の比丘達によつて傳持されている間に、次第に西方語の影響を受けて殆んどピシャーチャ語の一種となつた〉がしかし〈佛陀の面影を傳えるために元來のマガダ語の特質も消失することなく幾分保存された〉と、結論づけていられる。その點、パーリ語の文法的特質が、西方印度語に最も近いとされるのが本書の立場である(**第三章**)

II 音韻論は、**音の分類**(**第四章**)パーリ**語と梵語等との發音綴字の比較**(**第五章**)**連聲**(**第六章**)に分れる。ところで、パーリ語の語彙の發音。綴字に關して梵語と比較したり梵語文法から說明解釋することは、近來のパーリ學者によつても試みられてきた。これは、パーリ語とその近緣語との關係を知る上において極めて重要であるが、本書では、特にこの點に留意してこの項を論じていられる。今、その主なる點を擧げると、

①パーリ語の基語の五分の一は梵語と全同であつて、殘りの五分の四も Sanskṛt と關係づけられる。このことは、パーリ語の正しい文法的起源を考える時に梵語的な基語を想定し、その基語から變異してパーリ語となつたとみる(p. 35)こと。(七種の類型的分類法)②**《音の轉化》《音の倒置》《音の同化》**等の諸項目について、本書の知識をもつことは Sanskṛt との關係から重要性をもつ點。③連聲に關しては從來の『パーリ文法』には殆んど觸れられなかつた諸點について述べていること。この點でも Sanskṛt 文法と關連して興味ある箇所である。

次に**III 語形論**については、便宜上二面から解說することにしよう。第一部は所

謂 declension で、**品詞**（**第七章**）**曲用總論**（**第八章**）**名詞・形容詞の曲用**（**第九、十章**）**代名詞の曲用**（**第十一章**）**數詞及びその曲用**（**第十二章**）。第二部は主として conjugation に關する段で、**活用總論**（**第十三章**）**動詞の變化**（**第十四、十五章**）**受動動詞と使役動詞**（**第十六章**）**その他の動詞相**（**第十七章**）**連續體と不定體**（**第十八章**）**分詞**（**第十九章**）**不變語**（**第二十章**）に亙るもので、本書の精讀に値いする個所の一つである。

一般にサンスクリット文法における曲用と比較して、パーリ語のそれは、不整備で且つ系統的でないことが目につく。つまり、Sanskṛt では名詞・形容詞の case の語尾變化が極めて系統的であるが、パーリ語では周知の如く必ずしも一定せず、同一格に對しても幾通りかの型がある。且つ格變化そのものに一見融通性があるので、結果的には Sankṛt のように嚴密にはゆかない。この理由は何か？ と言えば、博士の言にも見られるように（cf. p.67）〈パーリ語が種々の言語的要素の混成である〉ということに由來するわけである。

ところで、本書（p.69〜）では、語尾による語基の分類について、Skt との關連上、古來の文法書とは別に -an, -ant, -ar, -as, -in 等の語基分類をとっている。しかも、それらの declension の中で、從來の文法書に示されていなかったもの、又よしあっても説明を缺くものについては、Vedic, Classical Skt. Skt. Buddhist Skt. 阿育王碑文等との言語學的關連から殘らずとりあげ明解な叙述をしていられる。この點は、特にパーリ語學研究徒に大きな羅針盤となるであろう。その極く一例を擧げると、

① a 語基 m. pl. N. の -āse (p. 69f) が Vedic の影響を受けたもので、Classical Skt よりも古い型であること。

② a 語基 m. pl. Abl. -bhi と Vedic の bhiḥ との關連から Clas Skt に見られぬ形であること。

③ i 語基 m. pl. N -ino は in 語基のそれの影響をうけていること。

④ o 語基 (cf. go) pl. G の gonaṁ は Vedic gonāṁ と關係すること。

⑤ -an 語基 (cf. brahman) m. sg. V の brahme は Budd Skt と關係すること。

⑥ -an 語基 (cf. kamman) nt. sg. Ac の kamma と skt karma との關係づけ。

等々である。

次に動詞（Verb）に入ると、先ず mood に能動（爲他）反照（爲自）という術語が目につく。これは、爲他・爲自では他動詞・自動詞とまぎらわしく、且つ、パーリでは爲他言にも自動詞が少くないからである。通例、パーリでは能動態（爲他）が多いことは既に周知であるが、反照態は古い gāthā に多く見られると注意している（p. 92）。ところで、パーリの conjugation は、Skt のようには整備されず、不規律であること名詞の曲用と同じである。本書では、Kaccāyana の文典分類と同じく動詞を七類に分けて説明している。その中で、特に注意していられる點は、（p.97〜）現在能動調語基が、同一語根から二種、三種の語基が作られることである。（cf. pp.97〜101表）そこにも、Skt に見られないパーリ語の混淆性、複雑性が窺われるわけである。

さて、conjugation の特例として本書が示している二三の點を列記するならば①Present. 反照態（A）1st pl. には ending に mhe, mahe, mha, の他に mase, mhase の形があること、3rd pl の -re は Vedic に見られて Skt にないこと。②Aorist. Skt では必ず過去符 **a** を附すがパーリは Vedic に近い關係上 **a** の過去符を附すものと附さない場合があることの例證③パーリ語が嚴密でないことの一例として **sandhāv**（走る）→**sandhāvissaṁ** は aorist, conditional, future の何れにも解される點、又 **gerund** に關しては、その **pratyaya -tvāna, -tūna** は skt に見られないが **Vedic** の **tvānam** 一般プラークリットにおける **-tvānaṁ -ttāṇaṁ, -tuāṇaṁ -tvāṇa, -tūṇa, -dūṇa** 等と關係すること。

等、恐らくこの種の文法書では最も詳細にして、且つインドアリアン諸語との連關に立つた優れた書である。

IV **造語法**では、**總說及び接頭辭**（第二十一章）**接尾辭及び語尾**（第二十二章）を、**V** **文章論**では**構文法**（第二十三章）**六合釋**（第二十四章）**格の用法**（第二十五章）**動詞形の用法**（第二十六章）が收められている。

ところで、パーリ語では構文の部分の位置については一定した規則はない、と言われるが、本書（pp. 158〜168）では、二十ケ條の細目に亙つて數多くのテクストから **rule** を求めていられる。これらの **rule** を知悉することは、そこからパーリ・テクストの讀解に當つても多くの有益な示唆に接するであろう。最後に **componnd** であるが、Skt の讀解が六合釋の理解に盡きるように、パーリのそれも同じである。ところが、この六合釋に關して、本邦で生れたパーリ文法書ではこの書程に詳述されていない。本書はこれらの缺點をも **cover** して實に詳細な解說を施されたものである。

以上、本書の文法上の二三の點について簡單な紹介を試みたのであるが、この書の卷末に附せられた附錄こそ、パーリ研究に志すものにとつて、こよなき道しるべであることを書き添えておきたい。そこでは、パーリ語學は勿論、パーリ佛教を研究された先人學人の輝かしい業績が、一堂に收められている。蓋し XIX C 以來西洋の學者によつて斯學が脚光を浴びて以來、フランスは E. Burnouf の《パーリ語に關する論文》にはじまつて、彼の地の **V. Fausböll, H. Oldenberg, R. C. Childers, V. Trenckner, T, W. Rhys Davids etc,** 目を轉じては本邦における先德諸賢の築かれた數々の業績等々、そうした絢爛たる學人の殿堂へ、いつしかわれわれを案內してくれるであろう。廣くパーリ語學、パーリ佛教學に志す人は、この**附錄I**を讀んでは恐らく先人の業績に深く頭を垂れ、畏敬の念を捧げつつも、同時に斯學が目ざしている未來への胎動を強く強く感じとることと思う。そのためには、讀者は、**附錄II**に收められた斯學に關する參考文獻と並んで**卷末の索引**を忘備のしるべとして精讀しなければならない。そこから、やがて、本書がこよなき伴侶となることを、つくづく味わうことであろう。（A５版三三三頁昭和三十年十一月刊、山喜房　千二百圓）（雲井昭善）